

体育学部の発展のために —21世紀に向けての中京大学体育学部に関する私見—

本 田 陽*

I. はじめに

創設40周年を迎えた中京大学体育学部であるが、日本の大学を取り巻く環境はこれまで以上に厳しい状況になると予想される。このような環境において中京大学が21世紀に向けてさらなる発展を遂げていくためには今後何をなすべきか？創設40周年にあたって体育学部の将来像に関して私見を述べさせていただきます。

筆者が以前に奉職していたドイツの大学は全てが国公立で学生の移動も比較的自由ということなどから、大学独自の特色というものが顕著にあらわれていない。著名な哲学者や文学者、自然科学者を数多く輩出した大学などはあっても、日本の大学に見られるような独自の「校風」、「建学の精神」といったものはほとんどないといっても良い。日本においては「大学全入学時代」、「大学が倒産する時代」、「学生が大学を選ぶ時代」などということがしきりに話題になるが、このような環境がここ10年以上続く中で私立大学が今後さらに発展を遂げるためには大学の個性、特に受験生にとって魅力的な大学の個性が特に重要となってくるものと思われる。

II. 中京大学体育学部の個性とは？

今後の中京大学体育学部の個性に関してはまず次の二つに分けて考えることができる。

- 他の体育系大学に対しての中京大学体育学部の個性
- 中京大学の他の学部に対しての個性

他大学に対する個性は受験生をめぐる大学間の競争の中で最も重要なもので、全国に数ある体育系大学の中でいかに中京大学体育学部に来たい受験生を多くするか、入学して良かったと実感して卒業させるか、高校の体育の先生、進路指導の先生に高い評価をしてもらえるかなどに関わってくる個性である。私立大学においては教育内容とともに（あるいはそれ以上に）大学の経営というものが重要になってくるが、将来は特に他の学部とは一味違う個性を打ち出し、中京大学のフラッグシップとしての体育学部を法人・理事会にアピールする必要性が出てくるように思われる。

体育学部の個性ということに関してはさらに次の二つにも分類できる。

- 社会的な状況に合わせて比較的短いサイクルでそれに対応していかなければならない個性
- 外的な変化に大きく左右されることなく中京大学体育学部が普遍的に持ちつづけていくべき個性（基本理念）

前者に関しては社会的な状況やニーズに合わせてカリキュラムや教育内容、入試方法、採用人事等の改革によって打ち出される個性といえるが、それだけではなく基本的な大学の姿勢や理念を外部的な影響に大きく左右されない普遍的な個性として作り上げていくべきではないか。

III. 個人的提案

21世紀に向けて中京大学体育学部がどのような個性を打ち出していくべきかという点に関してはさまざまな考えがあると思うが、具体的に実現可能かどうかは別にして長期的に持ち続けていくべき個性を中心として個人的な提案を示してみたい。

*講師

1. 国際化

80年～90年代は海外の大学との交流提携、海外分校設立、留学制度、留学生受け入れ等が各大学で盛んに行われた国際交流の第1期といわれているが、「国際交流のマス化」が進み、大学名や学部・学科名に「国際…」と言う名称が使われることが多く見られた。

- 国際交流が盛んになったことが真の国際化につながっているか？

いわゆる国際交流ブームに左右されない（受験生集めの手段だけに終わらない）堅固で実践的かつ長期的な交流の必要性が問われる。最終的には外国でも通用する人材（学生や教員）の養成が目標となるが、「外国で通用する＝世界的なレベル」ではなく、まずは外的な環境（日本か外国か）に関わらずに本来の自分の能力を活かすことができるかが問題となる。そのためには手軽に頻繁に交流が行える背景が必要である。（国際交流の日常化）

- 第1歩としては形式的な大学間の提携だけではなく体育学部独自の自分たちに最も適したパートナーの開拓

中京大学の提携校にとらわれず体育学部にとって最も交流に適した大学・学部を独自に見つけることが先決。そこから学生の交流、留学制度だけではなく教員の交流（将来的には客員教授制度、交換講座などの設置）、海外における研究調査活動拠点等に発展させて行く。最初は学部同士のパートナーシップから将来的にはカリキュラムや教育内容のシンクロも図る。

21世紀の国際交流は複数大学、複数国家間の交流ネットワーク（バーチャル・ユニバーシティー）が中心となる第2期に入っていくものと思われるが、まずは実践的な中京大学体育学部独自の交流スタイルの確立が先決であると考ええる。

上記のような国際化のための課題点としては下記のものあげられる。

- 国際化自体は目新しくない発想であるがそれをいかに現実的なもの有効なものとして定着させるか（事務的な負担も含めて）
- このようなシステムをいかに有効に外部にアピールできるか
- 学生の海外留学のイメージ（留学はエリート学生だけのもの、留学は費用がかかる、準備・手続きが難しいetc.）を変革する必要がある
- 語学教育の見直し（海外で生活、留学できるための実践指導、スポーツ専門用語の学習等）

2. 幅広い分野・業界におけるスポーツのスペシャリストの養成

これに関しては前述の比較的短いサイクルで社会的な状況やニーズに対応していく個性に属するものであるといえる。本体育学部ではすでに1989年の学部改革案で教育の目標として「近い将来スポーツ・体育の専門職として社会的需要の高まると予測される新しい分野に対応しうる教育」があげられていたが、それをいかに実践で実行していくかという具体的な改革が今後の課題であると思われる。現実的には本体育学部の卒業生ができるだけ多くスポーツ関係の職につけるような教育内容ということになる。

これまで体育学部を卒業した学生のスポーツ関連の就職先としては古典的なスポーツ・体育の分野（体育の教員、インストラクター、コーチといったスポーツに参加する人に関わる職業、スポーツ用品・施設に関わる職業）が主であったが、スポーツ以外の業界（様々な分野で「スポーツという商品」またはそれに関係した商品を扱う業種）におけるスポーツの専門家（スポーツツーリズム、スポーツメディア、アパレル業界等）の需要が予想される。それに加えて健康、介護といった分野が体育と融合していく可能性も高い。

このように市場のニーズに合った人材の養成ということに関しては専門学校の特長を積極的に取り入れること、他の学部、または産業界との協調も必要になってくる。理想的には現在の各コースの特徴

をもっと強く打ち出し、学生が卒業後それぞれのコースの分野で活躍できることである。

3. 中京大学体育学部の競技スポーツにたいするスタンス

スポーツまたは特定の種目の強化（例えば箱根駅伝での優勝・上位入賞）を大学のPR手段の一環として利用するやり方は他大学でも古くから行われているが、ここではそのような一時的な強化ではなく体育学部を有する大学の基本的な理念として競技スポーツ強化に取り組む姿勢を見せるのか、あるいは競技スポーツにはこれ以上力をいれずに他の分野を重点的に発展させていくかを体育学部の共通理解としてはっきりさせておく必要があるように思われる。

▶競技力のある高校生にとって魅力のある大学にするか？

▶競技スポーツはあくまでも課外活動としてとらえ現在以上には重要視せず、総合的に優秀な学生を育てることに最重点を置くのか？

前者を推進していく背景としては次のものがあげられる。

- 現状では本学は日本のトップレベルの高校生競技者にはあまり魅力のない大学であるという声を聞く
- 受験者人口は減っても競技スポーツをする高校生の割合は減らないのではないかとそれらの受験生をターゲットにしないでよいか？
- スポーツの弱い大学、スポーツ施設の貧弱な体育学部は受験生にとって良いイメージにはならないのではないかと？

上記の点をふまえた上で体育学部として競技スポーツ強化という共通の理解が得られれば、入試制度や奨学金制度なども含めた具体的な対策が顧慮されることになる。もちろん優秀な競技者をリクルートするだけではなく、中京大学入学後さらにハイレベルの競技者に育て上げるべき対策もなされなければならないのはいうまでもない。

後者に関しては将来全国的に大学単位のスポーツから総合型地域スポーツクラブに移行する可能性が強いようなら、大学のハードウェア（スポーツ関連施設）のもとにトップレベルの選手の強化も含めた地域型スポーツクラブ（ヨーロッパ型のスポーツクラブ）に選手の強化はまかせ、体育学部では学生の教育を最優先するという基本的な姿勢を打ち出していくことになる。

また総合型地域スポーツクラブということに関しては「開かれた大学」としての特性を全面に打ち出し、中京大学の施設を最大限に活用し大学を拠点とした地域スポーツクラブ設立に取り組むことも将来的には大きな課題、チャレンジになるのではないかと。

IV. おわりに

中京大学に赴任してまだ3年弱という短い期間で将来像を述べるのは困難であるが、筆者の私見を紹介させていただいた。体育学部の将来像に関してはまだまだ多くの視点があるが、上記の3点に絞って今後の方向性を述べた。実現に関しては様々な問題があるのは承知の上である。筆者と同じ1959年に生まれ、昨年40回目の誕生日を迎えた中京大学体育学部は将来的にも大きなポテンシャルを秘めていると確信している。